

第37回

日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会総会・学術講演会

第37回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会総会・学術講演会が2019年2月7～9日、大阪医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室の河田了先生を会長として、大阪府大阪市(ホテル阪神)で開催された。ここではアレルギー免疫療法の話に焦点を当てて紹介する。

一般演題3：免疫療法

松岡伴和先生(山梨大学)らは「アレルギー免疫療法におけるアレルギー患者血清中抗体価比(s-IgE/t-IgE)の有効性」と題して発表し、ダニ舌下免疫療法の臨床効果予測に欧州アレルギー学会(EAACI)が示した「specific-IgE(s-IgE)/total-IgE(t-IgE):16.2%以上」を用いることは困難と考えられると述べた。「s-IgE/t-IgE:16.2%以上」はアレルギー免疫療法のバイオマーカーとしてEAACIが2017年に公表した。しかし、根拠となる論文のエビデンスレベルは高いとはいえない。そこで同氏は、わが国で行われたダニアレルギー性鼻炎患者を対象としたダニ舌下錠の臨床試験の成績を用い、投与前のs-IgE/t-IgEと投与後44～52週の総合鼻症状薬物スコア(TCRS)のデータから血清中抗体価比の臨床効果予測能を評価した。その結果、s-IgE/t-IgEが16.2%以上の患者は若年、特異的IgE抗体高値、単独感作の特徴を示し、s-IgE/t-IgEが16.2%以上と未満の患者で投与後44～52週のTCRSに差はなかった。このことから同値をカットオフ値として用いることはできないのではないかと同氏は結論した。

アレルギー免疫療法は長期の治療期間を要し、効果が認められないケースも少なからず存在する。患者負担軽減のためにも臨床効果の予測や効果判定に有用なバイオマーカーの確立が期待されるなか、櫻井大樹先生(千葉大学)らは「スギ舌下免疫療法におけるスギ反応性Th2細胞の解析」と題して発表し、スギ反応性ST2⁺メモリー Th2細胞が候補の1つに挙げられることを紹介した。同氏は、一般診療でスギ舌下免疫療法を施行した患者の花粉飛散期における症状経過を症状日誌で調査し、治療開始前およびスギ花粉飛散期前後に採取した末梢血のスギ反応性ST2⁺メモリー Th2細胞の変動をフローサイトメトリーで解析して両者の関連を解析した。その結果、スギ反応性ST2⁺メモリー Th2細胞はスギ花粉飛散後に増加したが、スギ舌下免疫療法著効例ではその比率が低く、年々低下傾向が認められた。また、スギ花粉飛散後のスギ反応性ST2⁺メモリー

Th2細胞の比率は、スギ花粉飛散ピーク時の鼻症状スコアと相関することもわかった。「今回の検討により、スギ舌下免疫療法はスギ反応性ST2⁺メモリー Th2細胞の反応性を抑制することで治療効果を発揮している可能性が示唆された」と総括した。

続いて塩野理先生(横浜労災病院)らは、単独投与が基本となっている舌下免疫療法にスギとダニの舌下免疫療法を併用(連続投与)した場合の有効性と安全性について検討した。「スギおよびダニに対する連続舌下免疫治療」と題した本発表によると、12～65歳の重複感作患者27例を対象に検討した結果、併用舌下免疫療法の継続が可能であったのは26例であった。有害事象は26例中12例に認められ、このうち1例は好酸球性食道炎で投薬が必要であった。1剤目導入と2剤目導入の間隔は4週間以上空けられたが、その間隔が短い患者や40歳未満の患者で有害事象が生じやすい傾向がみられた。また、スギ舌下免疫療法とダニ舌下免疫療法のどちらを先に開始しても安全性に差はなかった。同氏は「有害事象のコントロールには投与方法の変更が有効である。併用舌下免疫療法は日常診療で認容され得る」と論じた。

佐竹雅史先生(東北医科薬科大学)らは、スギ舌下免疫療法の臨床応用から3年以上が経過したが、その実態に関してわが国では十分な検討がなされていないことから、今回、舌下免疫療法および皮下免疫療法を施行しているそれぞれの患者に対して自記式質問票を用いた実態調査を行い、「スギ舌下免疫療法3シーズン目の臨床効果-皮下免疫療法との比較-」と題してその成績を報告した。①自己管理であっても90%以上の患者で週5日以上投与が行われていた、②舌下免疫療法と皮下免疫療法で治療満足度に差はなかったが治療の負担感には差があり、特に女性では舌下免疫療法のほうが軽度であった、③舌下免疫療法の自覚的効果は、治療強度の高い皮下免疫療法と比較して非劣性であり、有意差はなかった。

岡野光博先生(国際医療福祉大学、岡山大学)らは「舌下免疫療法の効果と唾液マイクロバイーム」と題して発表し、スギ舌下免疫療法の効果発現に対する唾液マイクロバイームの影響を検討した結果、著効した患者では唾液中の*Bacteroidetes*門細菌組成率、特に*Prevotella*属細菌と*Porphyromonas*属細菌の組成率が高く、この両者の組成率は唾液刺激によるTHP-1細胞からのインターロイキン(intereleukin:IL)-10産生量と有意な正相関を示したこと